

文化

✉bunka@asahi.com

新春詠

新年会

大串章

初空を見上ぐ俳句と共に老い
今年こそ今年こそはと生きて来し
新年会企業戦士の皆老いて

猫は人は

高山れおな

奥処より薬も歯も朽ちて年つまる
歯科医追ふ口の中なる冬星を
年の夜や愛を歌ひて猫は人は

風

小林貴子

カピバラのやうな薄目に年送る
凧揚や風通し良き心欲し
まつろはぬ諏訪の神より鎌鼬

ひとつとせ

長谷川權

ひとつとせ汀子羽子板藤娘
初富士や半分はまだ闇の中
からまつに戦争の冬つつきけり

湖西のさざ波

高野公彦

街川に街の灯映り年の夜のこの静けさよ戦
禍遅けく
初空のひかりに思ふさざ波の寄する湖西の
砂浜の燦

猫のゐる暮らし

永田和宏

早く起きろ、飯だ飯だ、とわが胸に乗りて
騒げる猫のゐる暮らし
抱かれるのがきらびで外に出たがつてトム
は小学四年生なり

夕さり

馬場あき子

夕さりの短檠の灯のしづかにも澄めるを見
つつ更へくる夜のあり *「夕さり」は茶事の名
仕事終へて海より上る月を見ぬさびしき國
をいさよへる月

正月の酒

佐佐木幸綱

朝酒を酌みつつ見おり樹に吊れる餌皿につ
どう冬の雀を
二十羽いや三十羽ほどいるだろう今朝も来
ているおしゃべり雀